

本を読む楽しさを伝えたい

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子

Q

生徒たちを図書室に連れて行く機会がありました。読書に没頭している生徒もいましたが、ぼんやりしていたり、読んでいるふりをしていたり、漫画を読んで友達と話をしたり、眠ってしまう生徒もいました。本を読む楽しさを伝えたいと思うのですが、どうもうまくいきません。なにか良い工夫はないでしょうか。

A

活字離れが話題になってずいぶんと月日が流れましたが、相変わらず読書嫌いの子どもに対する指導で苦労されている先生方は多いようです。しかし、子どもたちの様子をよく見てみると、おもしろいことには敏感で、おもしろいことがわかれば、必ず手を伸ばしてきます。ゲームをしているから、部活が忙しいから、勉強でそれどころではないからと、本を読まない理由はいろいろ考えられます。けれど、おもしろい本が

あれば、ゲームをしていても、部活に熱中していても、本に手を伸ばすものです。無理にゲームをやめさせるよりも、おもしろい本の存在を教えてあげることが効果的だと思います。子どもたちと本のおもしろさを語り合える時間は楽しいものです。本のことなら〇〇先生に聞けば間違いない、と思わせたいですね。今回は、私が日ごろ、どんな工夫をして子どもたちと本を出会わせているかを紹介します。

「本の紹介」の威力

私の若いころの話です。初めての転勤で行った学校は、一般的な言い方をすれば荒れた学校でした。初めての授業にどきどきしながら入っていくと、チャイムが鳴っているにも関わらず座っている子どもが半分ぐらいしかいませんでした。

「座って、座って」と、名前もわからない子どもたちに言いながら、授業が始まったのは五分後が十分後だったように思います。夢中で話しかけて座ってもらいました。「座ってもうう」という表現は変ですが、まさに、そのような状況でした。いったん座った子どもたちは、少しだけ新しく来た国語科教師に興味深げに見ていました。初めに、学習の見通しや言葉に関するコラムなどをプリントした「国語教室通信」を配って、国語に関するいろいろな話をしましたが、「本の紹介」のコーナーのときだけ、雰囲気が一変と引き締まった感じがしました。

次の日、授業の初めに本の紹介をしてみました。そのときの本は『はてしない物語 ミヒヤエル・エンデ 作／上田真而子訳（岩波書店）』でした。持ち重りのする大部な本で、読書なんかしたことないよ、という

子どもたちにはとても読めそうもない雰囲気があります。けれど、うまくいくような予感がありました。なぜなら、普通の本と違って文字の色が二色に分かれていたり、装丁が美しくて重厚で、魅力的だと思わせる

要素がいくつかあったからで、予想は的中し、ちょっとしたインデブームが起きました。こんなに分厚い本がこの学校で話題になるなんて、他の先生方も驚いておら

今回は... 普遍性・膝を打つ・枠組み・視点・視点・フチ・矢張り

国語教室通信

No. 11
H22・12・2

フチ哲学

——ただ深く考える——

再び、佐藤雅彦さんの登場です。先日「視点」の切り替わりについて触れました。佐藤さんの中には、常にこの切り替わりをスイッチが、何かを立ち上げ、考えること、スイッチがONになるようにする。

自分の身の回りの「フチ」も、ちゃんと深く考えてみることで、普遍性が見えてくるものなんですね。そんな発見を伝えたい。この「フチ哲学」で、何度読んでも「なまじりわい、何で読んでも「なまじりわい、打つ」が、ぜひ、一読を。

今回のテーマ「枠組み」ということ。私たちが、ある場の中にある、同じ行動や思考の集まりを「枠組み」と呼んでいます。私たちが、この世の中を歩くとき、無意識のうちに、この「枠組み」の中に身を置いています。この「枠組み」が、私たちの思考や行動を、無意識のうちに、この「枠組み」の中に縛りつけている。この「枠組み」が、私たちの思考や行動を、無意識のうちに、この「枠組み」の中に縛りつけている。

「フチ哲学」佐藤雅彦 中公文庫

▲「国語教室通信」は、毎回見開き2ページで作っています。右側のページには、いろいろな本から得た情報を取り上げることが多いです。この号では、著者の佐藤雅彦さんの許諾をいただき、「フチ哲学」からイラストを転載しました。左のページでは、「今週の本棚」「漢字コーナー」に加え、言葉に関する話題を取り上げています。

書名	著者名	出版社	読んだ日・メモ	ページ	合計
23 カラフル	森 絵都	文芸春秋	9/13 原作はストーリー展開が面白い!!	259	5200
24 ギャルの日々	森 絵都	集英社	9/17 不可解な現象が面白い!!	326	5526
25 銀河鉄道之夜	宮沢 賢治	新潮社	9/20 小さい頃に読んでいた...	357	5883
26 ハニー・ハニー	加藤 浩二	集英社	9/24 上手いって、自分の歌で歌はばい	235	6118
27 新世紀の身体書	柳 隆司	理論社	10/7 読者の疑問に答えて!!	58	6176
28 温泉デイズ	瀬尾 まいこ	角川書店	10/9 読める!!	203	6379
29 おる日、アロハス	山本 浩一	集英社	10/18 面白い...	476	6855

▲一万ページの用紙は、生徒たちがいつでも追加して書けるようになっています。台紙に貼り付けていくので、3年間の読書の軌跡がわかります。

読書一万ページ

「読書一万ページ」という取り組みは三校目に転動したときの同僚の先生が熱心に取り組んでいたものです。子どもたちは読んだページ数をどんどん書いて、その累計も記録していきます。年度末に一万ページに達した人たちに学校長からの表彰状（読書一万ページ達成賞）を渡すと

今勤めている学校では、図書委員が毎週金曜日に読書一万ページの用紙を集めて図書室に提出します。それを司書の方がエクセルに入力し、常に累計のページ数がわかることになっています。司書の方がいらっしやなくても、自分たちで累計を出すのも楽しいですし、定期的に集めていけば継続できます。子どもの記録をコピーし、ときどき国語の時間にみんなで読書について話したりすることもあります。

朗読劇場

この取り組みは、私の所属する勉強会のメンバーが考えたものです。いわゆる「読み聞かせ」のよう

なものですが、「読み聞かせ」というてしまつと、なんだか幼い感じもあり、中学生にはあまりぴつたりとはいえません。「朗読劇場」というネーミングは、中学生にふさわしいなと思っています。本を読んだことのない子どもにもこの「朗読劇場」は好評です。なんといつても「劇場」なので、読んでいる最中に注意されたり、後で感想を聞かれたりしないのが人気のようです。ただ聞いているだけ。そういう時間もあつていいですね。私の場合は「朗読劇場」の名にふさわしいように、カーテンを閉め、電気も黒板のところだけつけて朗読をします。雰囲気抜群です。たくさん言葉が耳から入ってくるのもいいんじゃないかと思っています。全部を読むことはほとんどありませんので、続きを本でどうぞとつと多くの生徒が借りに来ます。これも本の紹介の一つのパターンといえるかもしれません。今回は、本を好きにさせるための小さな取り組みをいくつかご紹介し

▼「今週の本棚」コーナー（「国語教育通信」より抜粋）

【今週の本棚】

『しばわんこ 和のころ』

作者 川浦 良枝

出版社 白泉社 ￥1350+税

柴犬のしばわんこが、日本古来のさまざまな行事、暮らし、マナーなどを楽しく紹介しています。柴犬が着物着たり、三毛にゃんこが黒衣だったり。楽しい!!

本は一人一人の子どもの対話を表現してくれます。こないいいチャンスをもらえるのだから、定期的に

れました。子どもたちの好奇心は健在でした。おもしろそうであれば、がんばれない人たちのために読んでおもしろければ、読んでおもしろければ、誰かに話したくなります。私と子どもたちとの間には本の話が行き交うようになり、そのついでにいろいろなことも話せるようになりました。「座って」と言わなくても座るようになりました。

本気で紹介する

本の紹介といっても、毎回同じパターンでは聞き手も印象に残りにくくなりますから、どんな紹介の仕方をすれば読みたくなるかを考えます。あるときはあらすじを、あるときは作者を、あるときは主人公をと、アプローチの工夫を考えました。主な観点を挙げてみます。

- 【本の紹介のアプローチ】

【内容に関すること】

 - ・ あらすじ
 - ・ 有名なフレーズ
 - ・ 登場人物
 - ・ せりふ
 - ・ 帯の言葉（キーワード）
 - ・ ポップ（※）の文句

【作者に関すること】

 - ・ 作者
 - ・ 他の作品

【感想に関すること】

 - ・ 読んだ感想・考えたこと
 - ・ 読んだきっかけ
 - ・ 朗読したい部分

【本の体裁に関すること】

 - ・ 表紙・装丁からのイメージ
 - ・ 出版年月日・出版社
 - ・ ページ数
 - ・ 値段

【その他】

 - ・ 同じテーマの作品
 - ・ 書評・ブックレビュー
 - ・ 書店の様子

このようにアプローチの観点を意識すると、それぞれの本を紹介するときの工夫点が見えてきます。その作品にぴつたり合った紹介の仕方を考え、子どもたちが読みたい、見てみたいと思えるようにします。一回一回の紹介をおるそかにせず、話の構成を考えていくうちに、教師自身のプレゼンテーションの力もつくような気がします。

本の紹介をするとき、必ず子どもたちは反応します。できれば、すぐに手にとって読めるように、実物を用意しておくといいですね。複数冊あるのが理想ですが、無い場合は予約制にすると、読みたい気持ちを持続します。

また、読んでみたけど読めそうにない、あまりおもしろくなかったということもあります。そんなときに、無理しないようにということを言い添えておくこと安心して借りていきます。

※ポップ：本の紹介やキャッチコピーなどを書いて、本のそばにパネルやスタンドで提示した広告

- 『1歳から100歳の夢』 日本ドリームプロジェクト編（いろは出版）

『お父さんのバックドロップ』 中島らも（集英社文庫）

『おもひでぎょうじ』 百瀬義行（晋遊舎）

『温室デイズ』 瀬尾まいこ（角川文庫）

『告白』 奏かなえ（双葉文庫）

『佐賀のがばいばあちゃん』 島田洋七（徳間文庫）

『卵の緒』 瀬尾まいこ（新潮文庫）

『天地明察』 沖方丁（角川書店）

『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』 ママチャリ（小学館文庫）

『わかりやすく（伝える）技術』 池上彰（講談社現代新書）